

家庭内ケア役割を果たす子どもと若者の不可視性

成蹊大学 松崎実穂

【1. 目的】

近年日本において子どもや若者が果たしている家庭内ケア役割についての研究が始まっており、こうした子どもや若者はヤングケアラーや若者ケアラーと呼ばれるようになりつつある。ヤングケアラーはケアを引き受けていること自体が外部からはわかりにくいと言われるが、日本におけるヤングケアラーや若者ケアラーの果たしているケア役割はどのように見えにくい＝不可視なのだろうか。本報告の目的はまず、日本で行われてきたヤングケアラーや若者ケアラーの行っている家庭内ケア役割のあり方について筆者が参加している日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクトにて実施した調査（一般社団法人日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト 2015; 2016）の内容と、筆者が行った中高年および高齢の家族を介護する若者を対象としたインタビュー調査の内容から、家庭内ケア役割を引き受けている子どもや若者が果たしている役割と、それが家庭内ケアを成立させている機序について考察する。次にそうして成立している家庭内ケアに組み込まれている子どもや若者の存在が不可視となる構造について検討する。

【2. 方法】

本報告における分析・検討に用いるのは①日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクトによる2014年および2015年実施の学校教員へのアンケート調査における事例と、②2014年6月から2017年1月にかけて筆者が実施した若者ケアラーへのインタビュー調査における事例である。①②とも調査行程および調査データの扱いにおいて、プライバシー保護の観点から必要な倫理的配慮が行われている。

【3. 結果】

自分より幼いきょうだいのケアを子どもが引き受けることで親が仕事に行けるといった、プライマリケアラーと目される担い手がケア役割を果たせないことが子どもによるケアを引き起こしている事例が見られた。中高年や高齢の家族をケアする若者の場合も、要ケア者のプライマリケアラーである者（要ケア者の子どもや配偶者にあたる中高年など）の行うケアを支えるためにケアを引き受けている若者の有り様が窺える。

【4. 結論】

検討した事例では、プライマリケアラーと目される家族成員がその役割を果たせないか、果たしきれない場合に、子どもや若者がそのケアを多かれ少なかれ引き受け（それが子どもや若者の生活や将来に何らかの影響を及ぼしているとしても）そのケア役割は家庭外から見えにくい形で家庭内ケアが成り立っている。本人や家族成員によるケア役割と責任への評価は高くないか、ケアをしているという認識がそもそも薄いこともある。にも関わらずその子ども・若者によって家庭内ケアが成立している。長期的に見てこうした状況が子どもや若者に与える影響をさらに明らかにしていく必要があるだろう。

文献

- 一般社団法人日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト. (2015). 「南魚沼市『ケアを担う子ども(ヤングケアラー)についての調査』《教員調査》報告書」 https://drive.google.com/file/d/1BuPOAzGiKRPSp_eNFcut9WayitYESxAX/view (2019年6月19日アクセス確認)
- . (2016). 「藤沢市『ケアを担う子ども(ヤングケアラー)についての調査』《教員調査》報告書」 <https://drive.google.com/file/d/1gzEw1jQVTDa01scqD06wm0I70cCcOKqr/view> (2019年6月19日アクセス確認)